－所蔵作品紹介－

大橋　行雄　OHASHI Yukio

シジュウカラハコ（小物入）

しじゅうからはこ（こものいれ）

作品データはこちら

旭川美術館では、木箱をテーマに既成の概念にとらわれないユニークな創造をねらいとし「はこで考える― あそびの木箱」展を企画開催している。第１回展は、1981年に道立近代美術館で開催されたものであるが、1987年の第２回展以降､当館で開催されている。

この作品は、1987年の第２回展であそびの木箱大賞を受賞した作品である。

ふたをあけると、羽を広げたシジュウカラ。飛び立とうとしても、片羽が箱と一体となっているために身動きがとれない。四十雀は、日本全土に分布する活発な鳥で、巣箱に入る習性をもつ。市街地でもみることができる元気に飛びかう四十雀のことを考えると箱に封じられたこの鳥が不憫でもあり、ふたの飾り穴は、暗闇に閉じ込められたシジュウカラのための光の窓にも思えてくる。タイトルには、「始終空にしておいてほしい箱」の意味もこめられているという。

作品は、１本のシナノキから削り出されている。一見、何の変容もないようにみえるが、木地をそのままいかす木地仕上げのやわらかな木肌、白木のぬくもりには、木ならではの味わいがある。箱のおおまかな彫り方にに対し、シジュウカラは羽の１本１本まで繊刻されている。シナは、北海道に多い落葉高木である。旭川生まれで現在は札幌に在住する大橋行雄は、３回を通じた出品作家で、各回とも北海道の木を主材とした作品を制作している。

普通の箱と思わせて、開けたときにあっといわせる遊び心。「優しい様で難しいものは箱である。生活（くらし）の中で日常目に触れているものを新たに作る事は、大変な苦労である。しかも遊びの精神何て。」とは、「シジュウカラハコ（ 小物入）」に対する作者自身のコメントである。

旭川美術館だより「氷華」No.30（1992.12発行）「収蔵作品から」より